1「PickApp」農場スタッフ管理アプリ。2 出展国の旗。残念ながら日の丸は見られず。出展企業のある韓国や中国、台湾の旗がなびいていた。3 第19回イスラエル国際農業展示会 Agritech2015 の会場入口。決して笑わない頑強なセキュリティースタッフが迎えてくれる。4 ごったがえす展示会場。地元の農業関係者に加え、世界117カ国から約1万人が訪れた。これまではアフリカ系のビジターが多く見られたが、今回は中国や東南アジアからの参加者が目立っていた。「各国から22の公式視察団が送られ、多くの政府高官や大臣級が来訪した」（イスラエル政府発表）

第1回

イスラエル農業ツアー

農家が作ったスマホアプリが欧米にも浸透中

本誌ではおなじみの、3年に一度開催されるイスラエル視察ツアー。4月27日～5月1日の5日間、イスラエルに乗り込んだ。総勢3名！　同国を代表する商業観光地・テルアビブで行なわれた国際展示会・アグリテックから印象に残った商品をピックアップする。　（文・写真／浅川芳裕）

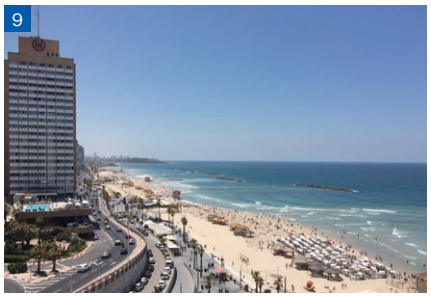
今回の視察ツアーの参加者は、中東の治安を心配する声があって、例年よりめっきり減った。しかし、そんなイメージをよそに、5月のテルアビブは地中海性気候の快晴よろしく、リゾートシーズン真っ盛り。滞在したホテルに面したビーチでは思い思いのビキニで地中海を満喫する若い女性であふれていた。次回、参加される方は水着を忘れずに。

さて、イスラエル農業である。その前に同国はハイテク国である。米ナスダックに上場している外国企業は大国インドに次ぐ2番目。人口800万人、面積は日本の四国ほどの小国が、である。長年、世界から「ハイテク天国」と呼ばれ、無数の世界的メーカーを有する我が国よりハイテク株市場での上場数が多い。

イスラエルのハイテク産業はGDP（国内総生産）の4割近くを占める。最近、グーグルが買収した地図ソフト「WAZE」やアップルが買収した顔認識ソフトもイスラエル製だ。その要因を分析するのが本記事の目的ではないが、アグリテック展示商品からもその一端が垣間見られた。

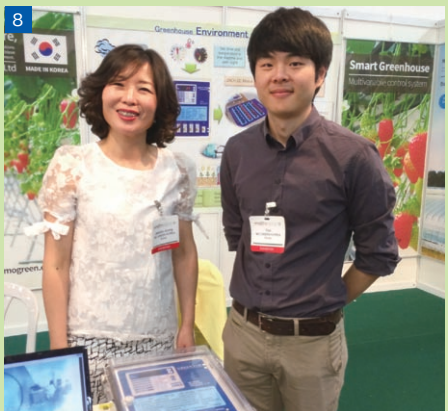
▼農場管理の見える化アプリ

写真1をご覧いただきたい。ただのスマホをバーコードのついた（農



9 滞在したホテルから見えるビーチと海岸通り。治安はすこぶる良かった。10 海岸沿いで語り合う海外からの修学旅行生たち。真夜中を過ぎてもビーチの明かりは消えることがなかった。11 12 13 テルアビブの旧市街ジャファの街並み。芸術家が集う区画でアトリエが並ぶ。路上のモニュメントも必見だ。

5 世界中の農場設計、ハウスや養鶏場施工、遠隔栽培指導を行なうイスラエル農業技術企業の共同出展。詳しくは今後の連載で取り上げたい。6 日本でもすっかりおなじみの点滴かんがいチューブと施設園芸総合機器メーカー「ネタフィム社」7 電磁弁の世界的メーカー「ベルマド社」。同社製品は水源が限られた日本の離島における畑地かんがいでは定番となっている。ベルマド社とともに今年、創業 50 周年を迎え、記念展示を行なっていた。8 韓国の施設内の環境制御機器メーカー「エムオーグリーン社」。オランダと並び、世界を席巻する施設園芸機器大国イスラエルに乗り込み、「スマート・グリーンハウス」というキャッチコピーで出展している。説明や対応もすばらしく、展示会終了後も来場御礼のメールが届いた。日本での代理店はエヌアイシステム社。



産物のケースに見立てた）ブロックにかざしている。仕組みはいたってシンプル。農場スタッフは収穫もしくは調整、パック詰めした野菜をケース一杯にしたらバーコードを読み取る。それだけだ。人別の作業効率を見える化するアプリである。

開発者いわく「生産のハイテク化にいくら投資しても、結局は人件費が農場の最終利益を左右する。ちゃんと働いているのかチェックしないとね」。彼は現役の若手農家で、自分の経営に便利だと思って作ったという。スタッフ管理だけでなく、GPS機能を使って、圃場区画ごとのケース数を計算すれば、同時に収量測定もできる。「イスラエル農家も使っているけど、欧米農家のユーザー数がすごく伸びているよ」と事もなげに話す。

日本で農場管理アプリといえば、使用肥料・農薬から作業、出荷、営業管理まで、何から何までパッケージされたものがほとんどだ。中小から大手のものまで無数にあるが、世界で売れているものは皆無だろう。前出の彼は、「会費は月5米ドル程度。日本の農場の人件費は高そうだから使ってみたら」と屈託がない。

ハイテクだから使うのではない。便利だから使うだけだ。ウェブサイトはこちら→ www.pickapp.farm